

会長就任のご挨拶

松原 仁

(公立はこだて未来大学)



このたび会長に就任した松原 仁です。よろしくお願いいたします。就任にあたって一言ご挨拶申し上げます。

人工知能は最近何度目かのブームを迎えています。人工知能のさまざまな研究成果が製品として世の中で使われています。マスコミでも人工知能が取り上げられることが多くなってきました。おかげさまで人工知能学会の会員も賛助会員も久しぶりに増えています。人工知能が世の中に広まっていくに従って、社会との関わりも深くなりつつあります。2045年問題あるいは技術的特異点 (singularity) も現実的な問題として議論がなされています。

私がずっと関わっているコンピュータ将棋を例に取り上げてみます (技術的な話は一切省略します)。コンピュータ将棋の研究開発が始まったのは1970年代のことでした。コンピュータチェスが始まったのが1950年前後だったことを思うと、随分遅れたスタートでした。最初の頃はルールどおりに将棋を指すのが精一杯で、実力をうんぬんできるようなものではありませんでした。プロ棋士も将棋ファンも人間を追い越すことは永久にあり得ないと言い切っていました。1980年代には市販ソフトが売り出されましたが、まだアマチュアの級位者のレベルでした。アマチュアの有段者レベルになったのは1990年代です。この頃になるとコンピュータ将棋の研究者はいつか人間に追いつき追い越すと思うようになりました (私は当時2010年にコンピュータが名人に勝つXデイが来ると言いました)。しかし多くの将棋ファンはまだ否定的でした。将棋ファンに認めてもらえるようになったのは2000年代になってからです。コンピュータ将棋がアマチュアの高段者レベルになってほとんどの将棋ファンが勝てなくなりました (私は少し弱気になってXデイを2015年に修正しました)。2010年代になってコンピュータ将棋は女流プロ棋士、引退男性プロ棋士に勝ち、現役男性プロ棋士5人との対戦が2回企画されました (電王戦です)。その電王戦が2回ともコンピュータの圧勝に終わったのはご存知のとおりです。

世間ではプロ棋士の敗北は大きな事件として取り上げられました。最初に負けた現役男性プロ棋士は心ない多くの人からインターネット上で「人間の恥さらし」と罵倒されました。そもそも趣味である将棋をコンピュータが指してどういう意味があるのか、もっと役に立つ研究をすべきではないのか、という非難も数多く寄せられました。プロ棋士も将棋ファンも、これまで世の中で一番将棋が強い存在であったプロ棋士がその地位を脅かされている (奪われつつある) という現実をにわかに受け入れられず、どのような対応をとればよいか戸惑っています。次にコンピュータ将棋と対戦するとすればトップクラス (タイトル保持) のプロ棋士しかあり得ませんが、それがすんなりとは実現しない状況になっています。トッププロ棋士が負けてしまうと後がないということでしょう。ちなみに対戦が実現してもなくても、2015年がXデイという私の修正予言は事実上の当たりだと思っています。

これからさまざまな分野でコンピュータが人間の能力に追いつき追い越していくと予想されます。そのときに当事者がどう反応するか、社会としてその現実をどう受け入れてどう対応していくのがよいのか、人間を超えたコンピュータがどのような役割を果たすべきか、人工知能学会として考えていく必要があります。その際に今回の将棋が良い題材になるのではないかと考えています。例えば、コンピュータより弱い存在になったプロ棋士は職業として存続するのかということ。チェスでは1997年にコンピュータチェスのDeep Blueが世界チャンピオンのKasparovに勝ち、もはや人間よりもコンピュータのほうが圧倒的に強いのですが、いまでもチェスのプロ棋士は存在し、(人間の) トッププロ棋士はチェスファンの尊敬を集めて高収入を得ています。将棋もチェスのようになることを個人的には期待していますが、チェスが(頭脳)スポーツとみなされているのに対して将棋は「道」とみなされているという違いがあるので、予断はできません。

人工知能学会に人工知能の社会的な影響について議論する委員会を設けました。こういう委員会はともすれば守りに入りがちですが、人工知能の発展は人間の敵ではなく必ずや人間のためになるはず。委員会は攻めに出て社会と人工知能の関係のあるべき姿を提言していきたいと考えています。これからも人工知能学会をよろしくお願いいたします。